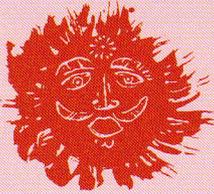


2021 生誕100周年
開館25周年



利根山光人

Toneyama Kojin

第109号 2021年4月20日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

令和3年度前期企画展 開催中

日々のすきまから —阿部夏希展—

2017 利根山光人記念大賞展準大賞受賞

2021年4月1日(木) — 7月1日(木)

「版画制作において最初に立ち塞がる壁は、木・銅・石・孔版画等の版種を問わず、表現に至るまでの技術習得に、多くの時間を必要とすることである。」

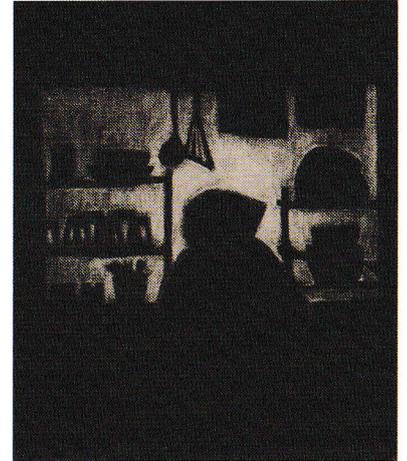
開館20周年を記念して開催された大賞展で審査委員長を務めた尾崎正志氏による審査評の一文である。

この記念展で「観測点」という4連作で準大賞を受賞した阿部夏希さんは、メゾチントという銅版技法で制作を続け、多数の個展やグループ展を開催してきた。

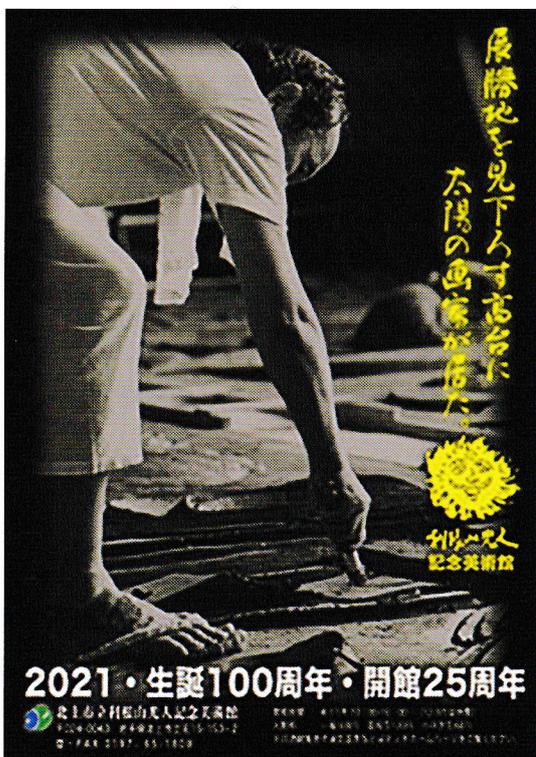
「今でも刷り上がりを完璧に予想することは難しいのですが、どんなふうに刷り上がるか想像する時間を楽しみながら制作しています。自分が版の上に刻み込んだものが刷った瞬間に全て現れることに面白さを感じているので、こうやったらどうなるかな、と、実験するように作っていきたいと思っています。」(阿部夏希)

阿部夏希さんは、そういった不確定な要素も含みながらの制作技法を通し、見過ごしてしまいそうな日常の風景やモノ、動植物たちに優しい眼差しを向け、生活を慈しむようなスタンスで制作を続ける作家である。

新たな形を与えられたそうしたモチーフにじっくり向き合い、白と黒の間にある豊かで繊細な表情のある版画表現の奥深さをぜひ味わっていただきたい。(専任研究員)



台所の窓(銅版2013年)



2021年は利根山画伯生誕100周年、 美術館開館25周年さらに企画展50回 目の記念の年です。今企画展を皮切りに、以下の 記念事業を開催します。

- ★中期企画展「阿^{あうん} 佐渡^{おんでこ}の鬼太鼓・画伯未公開作品展」7.3(土)-9.2(木)
佐渡市に保管されていた油彩の大作を公開します。
- ★後期企画展「美術館のあゆみ展」9.4(土)-11.30(火)
過去6回の記念大賞展受賞作品を展示します。また、企画展
チラシや通信などで館の歴史を振り返ります。
- ★「記念式典・祝賀会」9.19(日)

他、「絵の修復作業の公開」をはじめ、「まちなか美術館」や「親子秋まつり」など、市民の皆さんに参加していただける企画を開催します。詳しくは市広報やウェブサイトでもご確認ください。

2021・生誕100周年・開館25周年

利根山光人記念美術館
〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2
TEL/FAX 0197-65-1808

TEL 0197-65-1808
FAX 0197-65-1808
ホームページ: www.tamemura-art.com

～@TONE美～ 『太郎さんと光人さん』 その5

(前号からの続き)

この『日本再発見－芸術風土記－』岩手編の最後には、仏教とともに入ってきた大陸文化に圧倒されて、エネルギーある独自の日本文化の守られるべき伝統が変質してしまったことの嘆きがつづられる。

光人さんの文明批評もまた歯切れがいい。

「今は世界が荒廃に向かっている。物はあるが心がない。世界的に見て美術や文学などのすべてが低い。文明が進みすぎて、人類は大事なものを失い、そして破滅に向かっている。今の文明を美術や文学で止めることができるなら、人間の手や眼の素晴らしさを復活させることだ。手仕事の大事さに気づかないといけない。・・・」

太郎さんに師事した岩手の美術家村上善男（1933 - 2006）がこう書いている。

『「——— 岩手、いったい何があるんだい？」

すぐさま、「鹿踊りと馬の群れです。」と答えた。

太郎ならどう見るか？

『「——— ふうん、馬と鹿か！」

その眩きで哄笑した。

・・・(中略)・・・花巻春日流鹿踊りを見て・・・。

『「——— まるでジャズだ！」

踊りはクライマックスを迎えようとしている。唸り、歯ざしりする太郎さんのカメラが近すぎる。ササラが撮影者を打ちつける。踊る鹿連。太郎もほとんど踊っていたのだ。」

(※『「踊る太郎」－撮る太郎を私は撮った』より)

この連載の冒頭で、写真やTV出演のパフォーマーとしての両氏について触れた。光人さんは幼児のような純真さで行動し、驚き続け、世の中のしきたりにも無頓着で全力で体当たりしている生きざまは「びっくり人間」「オドロキ人間」とも言われた。

片や、太郎さんのパフォーマンスは強烈すぎて、今でも世の多くの人が容易にその雄姿を思い出すことができるだろう。しかし、当然二人とも単に奇抜な行動や直感だけで生きていたわけではない。前述のように日本古来の文化的エネルギーの復活を願い文明批判の精神を貫く以上、冷徹なる思索に基づいた知性と時代を見抜く目を磨き続ける姿勢を常に保っていなければいけない。

東北学を提唱する民俗学者赤坂憲雄は太郎さんをこう評する。

「二十代の太郎がフランスで学んだ最先端の民族学や社会学の知識が息づいていることに、いたく関心をそそられる。いわば学問的修練の痕が刻まれているのである。・・・断じて、ただ者ではない。直感や天才が語らせているわけでもない。付け焼き刃の知識を振り回しているわけでもない。太郎はあきらかに、一人の身をやつした民族学者として恐山という未知なるフィールドに降り立っていたのである。」

一方、美術評論家三木多門による「利根山光人の軌跡～ヒューマニズムと文明批評～」という論文の光人さん評。

「利根山光人というアーティストの何よりの特色は行動的なところにある。対象の中に身を挺し、感動を深めて造形化する。・・・『ハーフメキシカン』と言われるほどメキシコにのめり込み、生命力あふれるマヤ・アステカとの出会いが文明に対する原点指向となり現代文明に対する懐疑が造形衝動を駆り立てる。新鮮な感受性を持続し、その根底にヒューマニズムに基づく文明批評が生き続けている。」

連載5回にわたり、同時代を生きた二人の芸術家の共通性を探ってみた。

地元で美術館を持ち、光人さんの大作にいつでも向き合える我々は、同時に太郎さんの息吹も間近に感じながら、発するメッセージを素直に受け止めていきたい。

その知性や、現場で対象に向き合う姿勢に我が身を省みつつ、決して小手先の仕事や時代への迎合に惑わされない芸術文化の発信や育成のあり方を模索していきたい。(専任研究員)

————— 了 —————

参考文献：「日本再発見－芸術風土記－」(岡本太郎著)、「岡本太郎の東北」(監修 岡本敏子・飯沢耕太郎)
「岡本太郎の見た日本」(赤坂憲雄著)、「黒い太陽と赤いカニ」(樫木野衣著)
「赤い兎 岡本太郎頌」(村上善男著)

発行 北上市まちづくり部生涯学習文化課

〒024-0061 岩手県北上市大通り1-3-1 電話 0197-72-8304 FAX 0197-63-3121



利根山光人「ふくろう」